

地域主体の地域課題解決型キャリア教育とは

AKB Future Project 推進委員会

平成30年5月22日（火）校内研修

講師：大正大学 地域構想研究所

教授 浦崎 太郎 氏

テーマ：今なぜ「地域」「探究」が必要なのか？～入試改革やAIを超える「学び」とは～

今回校内研修の講師を引き受けていただいた浦崎 太郎 先生は現在大正大学に勤務していますが、以前は岐阜県の高校教諭でした。今回は、浦崎先生が高校教諭の際から取り組んでいる、「地域主体の地域課題解決型のキャリア教育」について、これからの教育改革の流れを踏まえ、ご講演いただきました。その様子をレポートいたします。

岐阜県も他の地方と同様に少子化が進んでおり、多くの地域で若年年齢層の減少等による地域の衰退に頭を悩ませていました。こうした地域課題を解決すべく、生徒自身が当事者としての意識を持ってほしいという思いから、岐阜県立可児高等学校勤務の際に「エンリッチ・プロジェクト」と銘打ち、学校と地域が縁を深め、学力向上（人づくり）と地域再生（まちづくり）を一体的に展開する事業をスタートさせました。

その事業では、生徒が実際に地域で行われている活動に参加しました。一例として、地域医療に携わる医師や看護師、ケアマネジャーなどが一つの事例を通して連携を深めていく研修では、「若年性アルツハイマー型認知症が発症してから10年ほどが経過し、現在要介護5である43歳男性とその家族」を事例として、ケアの在り方や職種間の連携の在り方などを議論していくものがありました。生徒はこの研修での専門家との議論をとおして、日々の学習が将来へつながっていることを理解し、それまで抱え



ていた不安や迷いがなくなるなどの変容が見られたそうです。また、ある研修では、「巨大地震が起こり、全国から大量に送られてきた援助物資の古着が大量に余った。保管する場所がなく、倉庫等を借りる費用はない。いっそ焼いてしまうか。あなたが援助物資担当の責任者ならどうするか。」について、生徒たちは様々な大人や専門家等と議論しました。このような取組をとおして、生徒は日頃から物事の本質を理解しようとするようになるそうです。

また、新潟県のSGHに指定されている高等学校で、SGHの趣旨を踏まえた地域探究を行い、海外研修でその成果を交流し、さらに各教科の学習へ落とし込んでいる事例も紹介していただきました。

昨年3月には中学校、今年の3月には高等学校の新しい学習指導要領が告示されました。人工知能の飛躍的な発展等を踏まえ、そのような社会を「生きる力」を育成する観点で、「主体的・対話的で深い学び」の実現が求められています。

そのような学びを実現するために、学びを学校だけで完結させるのではなく、学びの場を地域社会に拡張させることや、探究を深めるには生徒自身が課題に対して問いを作ること取組が変わると、お話しいただきました。「地域主体の地域課題解決型のキャリア教育」のように、「地域」に重要なヒントがありそうです。